

●春日部市民文化講座（第 1 回） 「千利休のわび茶」

◆日時：2012 年 7 月 25 日(水) 11 時（ぽぽら春日部 6 階会議室）～12 時

■「わび」と「さび」

これから「千利休のわび茶」についてお話をさせていただきますが、皆さんの中で「わび」と「さび」は、こんなことだとお答えいただける方はいらっしゃるでしょうか？「わび」と「さび」とは違いますし、さらに「きれいなさび」というものもあります。そんな難しい話をさせていただきます。「わび」も「さび」も見えない、概念的なもののなので、「わび」は侘しいと書き、「さび」は寂しいと書きます。「わび」の代表が千利休の茶であり、「さび」の代表は俳句ということができるとかと思えます。さて、「わび」の代表が千利休の茶と言いましたが、「わび茶」は千利休一人でできたのか…という疑問であります。利休には“利休七哲”と呼ばれる高弟 7 人集がいました。蒲生氏郷、細川忠興（三斎）、古田重然（織部）、芝山宗綱（監物）、瀬田正忠（掃部）、高山長房（右近/南坊）、牧村利貞（兵部）の 7 人です。こうした利休を中心としたグループで「わび茶」が完成されていたのではないかと、最近、こうした研究が進んでいます。

■村田珠光と武野紹鷗の茶の湯

「わび茶」の完成が千利休（1522-1591 年）と利休七哲によるものとする、「わび茶」のはじまりを考えなければなりません。はじまりは、村田珠光（むらたしゅこう 1423-1502 年）と言われています。珠光は能阿弥（のうあみ、1397-1471 年）により茶や能、連歌の影響を受け、一休宗純（1394～1481 年）との関わりから「茶禅一味」（ちやぜんいちみ、茶と禅は行う事柄は違っていても、人間形成の道という根本において両者は一味であること）の精神を追求し「わび茶」の精神を生み出し、四畳半の茶室を作ります。「南方録」では、勝手に使われていた台子を客前の点前用の棚として登場させたと記されています。そして、利休の師である武野紹鷗（たけのじょうおう、1502-1555 年）は、「草庵の茶」（侘び茶の思想を茶室建築に表したもの）の創始者と言われています。

■堺商人和茶道

ここで戦国時代最大の貿易都市「堺」について考えてみたいと思います。堺という町は、会合衆（えごうしゅう：室町時代から安土桃山時代の都市で自治の指導的役割を果たしていた評定組織。）が仕切っていました。その会合衆の中心が、海外貿易などを行っていた有力商人の納屋衆（なやしゅう：倉庫業商人）であります。堺の人たちは、経済的にも精神的にも進んでいました。応仁の乱以来、京の町は戦禍に包まれ、住む場を失った文化人たちも多くが堺などに疎開して住んでいました。茶の湯の言葉に、「市中の山居」というものがありますが、町中に居ながらにして山中の風情を楽しむこと、すなわち日常の中に非日常の空間を取り込み、その空間と時間を楽しむということを表わしますが、戦乱の中で市中にあって、茶人達は侘びしい草庵を構えて、そこで心豊かに茶を楽しんでいたのです。

■日比屋了慶と千利休

堺の豪商の一人に武野紹鷗がいました。当時の千利休は田中与四郎（よしろう）と言いましたが、この友人であった日比屋了慶（または「了珪」と書く。生没不詳）もまた武野紹鷗の弟子でありました。田中与四郎の家は、堺の海鮮類取扱いの大店でしたが、さらに大店が日比屋了慶の家でした。日本に南蛮船が到来したのが 1543 年、その時に鉄砲が伝来し、そして宣教師のフランシスコ・ザビエルが日本宣教の目的で渡来したのが 1549 年のことです。ザビエルは薩摩に上陸し、肥前平戸、博多、周防山口から海路で 1550 年 12 月に堺に到着します。その時、堺で手厚くもてなしたのが、日比屋了慶でした。その後、日比屋了慶は、当時南蛮寺と呼ばれた教会の中心人物になっていくのですが、宣教師ルイス・アルメイダ（船医であったが、その後宣教師となる）が病に倒れた時に了慶は大変手厚い看護を行い、快気祝いと了慶自身の受洗の祝いを兼ねて自邸で茶会を行います。その時の様子をルイス・アルメイダがこのように記録しています。「食事が終わってから、私たち一同はひざまづいて我らの主なるデウスに感謝いたしました。こうすることは日本のキリシタンの良い習慣だったからです」と、日比屋了慶の茶の湯には、すでに祈りがなされていたのですね。了慶の屋敷は、このように宣教師や信徒達に解放されていて、毎日のようにミサや説教が行われていました。こうした日常の交流の中で、与四郎であった利休は、宣教師達とワインを飲み、肉を食べ、回しのみをする姿を見ていたに違いないと思うのです。利休のわび茶が構築され完成されるまでの過程において、キリスト教の影響があったと考えられます。茶人が茶巾で茶碗を清める仕草は、カトリックで聖杯を清めるやり方と全く一緒なのです。これは、偶然の一致とは思えないことなのです。

■織田信長から豊臣秀吉へ、そして千利休

織田信長（1534-1582 年）がいち早く目をつけたのは、日本を掌握するためには安南（現在のベトナム）やポルトガルからの鉄砲や武器を押さえることであり、それは堺を押さえることになるのです。その当時は、与四郎から抛筈斎（ほうせんさい）と号して、堺の豪商・今井宗久、津田宗及などと共に信長の茶頭として雇われていくのです。

それは、政商としての色合いが濃かったのではないかと思います(天正元年、1573 年頃)。信長は、茶の湯で家臣たちを懐柔する「茶の湯御政道」というものを始めます。これは、茶碗や茶入一つが城や国一つと同じ価値を持ち、茶会を開くことも信長が許可するというものでした。信長は、茶の湯によって自らが構築しようとする世界を作ろうとしたのです。信長が朝倉攻めを行った時に、利休が信長に鉄砲玉(武器)を送ったことに対する礼状が表千家に伝わっています。この頃には、利休が政商として信長に近づいていたことが分かります。そして、天正 10 年に信長が本能寺の変で倒れると、豊臣秀吉の茶頭として秀吉と一緒に「茶の湯御政道」を進めていくのです。秀吉と利休が結びつくキーワードは「天下一」ではないかと思います。秀吉は全てにおいて「天下一」を好みます。千利休という名は、天正 13 年に秀吉が企画した禁中茶会に出席するために、正親町天皇から与えられた居士号です。この頃の茶は「利休(りく)の茶」と呼ばれます。天正 14~15 年頃で、利休が秀吉のもとで大きな権力をもって活躍した時代です。黄金の茶室かと思えば、二畳の茶室、黄金の茶碗に黒の和物茶碗とさまざまに変化していく時代です。山上宗二記には利休のわび茶に対して、「山を谷、西を東と茶湯の法度を破り、物を自由にす」と急激な変化を批判する部分もあります。

■千利休の死

天下を統一して勢力と欲望を拡大していく秀吉、一方で二畳、さらに一畳半の茶室まで全てをそぎ落としていく利休へと変化していきます。そんな秀吉と利休の別れについては、いろいろなことが言われています。大徳寺の山門に寄進した利休のために作られた利休像に対して石田三成が讒言したという話、利休のキリシタン説、朝鮮攻めに対する反対、茶道具に対して高額の値段を付けて売ったというような話等々、どれも確証はありません。まさに利休の死は謎です。ただ、自分の欲望を拡大していく秀吉と、初めは政商として近づき、どんどん捨てていき、最後は「賜死(しし)」と自らの命まで捨てていく利休、大きな違いがあります。利休の目指した「わび茶」とは、とても厳しい世界だと思うのです。

■千利休のわび茶革命

「千利休のわび茶革命」には、3つの要素があります。

1. 茶室における革命 「書院から小間へ」

室町時代は書院における茶でありました。足利義政の銀閣寺の東求堂に作った書院「同仁斎」は四畳半ですが、多くは広間でした。そして、珠光と紹鷗の四畳半、それを三畳、二畳、一畳半に凝縮していったところに茶室の革命があったと思います。さらに、茶室に「炉」という囲炉裏を持ち込んだのです。天正 10 年の天王山の合戦で、明智光秀と対峙した秀吉は山崎に陣を構え、利休に茶室を作らせました。これが二畳の茶室「待庵」(国宝)です。私はこの待庵に座してみても、この前後に利休の「わび茶」が完成したと思ったのです。待庵の杉丸太を右近が目利きし、利休のわび茶を一体となって作り上げたことを喜びました。日本の文化には「ハレとケ」がありますが、それまでは裏方の仕事とされていた湯を沸かし、茶を点てる仕事をお客様の前に出したというのが第一の革命です。

2. 道具における革命 「唐物から和物へ」

それまでの茶道具は唐物(宋、元、民時代の美術作品だけでなく)が主体であったのですが、和物(日本で焼かれたもの)が使われます。自分達で作ることのできる道具が使われるようになり、赤から黒への変化もありました。【写真は長次郎茶碗「面影」】



3. 点前における革命

おもてなしの革命です。仕える者は袱紗を着けること、裏での所作である清めの儀式、羽ぼうきで茶室を掃くこと、茶室に炉を持ち込み、灰を播き、炭を注ぐことなど、それまでには裏で行われる仕事でした。茶の湯を点てる準備から、茶を点て、片付けるまでの一連の行為を点前として見せるものとなりました。

■さて、皆さんの「わび」とは何でしょうか？

最後の言葉として「一期一会」をあげたいと思います。江戸末期の大老で茶人の井伊直弼が「茶の湯一会集」に記した言葉ですが、「一期とは、あなたの死ではなく私の死です」というメッセージが利休の「わび」、捨てていく姿から読み取れるのです。秀吉の辞世は「露と落ち露と消えるわが身かな浪華のことは夢のまた夢」ですが、秀吉に切腹を命じられて賜死した利休の遺偈(ゆいげ)では、「人生七十、りきいきとつ。吾がこの宝剣祖仏共に殺す。提る我が得具足の一つ太刀、今此の時ぞ天に抛つ」(意味: 人生ここに七十年、えい、えい、えい(忽然と大悟した時に発する声)。この宝剣で祖師仏陀も我も共に断ち切ろうぞ。私は手慣れた武器である一振りの太刀をひっさげて、今まさに我が身を天になげうつのだ。)と…。全てはお客様へのおもてなし、自分の全てを捧げること、捨ててこそできるおもてなし、そんなものが見えてくるのではないのでしょうか。

高橋先生のお話に引き込まれ、利休さんが残してくれた「わび茶」の世界を学ぶ旅がはいよいよスタートしました。